

見るともなくBS放送にチャンネルを合わせた『ラッシュ・ライフ』（マイケル・エライアス監督・1993年・アメリカ）という映画、つい見てしまった。脳腫瘍に冒されたトランペット吹きと、女にだらしのないサククス吹きとの友情物語で、映画そのものはどうってことないものだったが、全編ジャズが流れ、クリフォード・ブラウンの残したトランペットやチャーリー・パークーのチェロキートという曲がキーワードで話が進められ、ただだ気分いい映画だった。ただただ気分いい映画というのは『ラウンド・ミッドナイト』以来だった。ハービー・ハンコックやロン・カーターなど魅力あふれる演奏家が流れるようなスタンダードナンバーを演奏しつつした『ラウンド・ミッドナイト』はストレスが溜まったときの睡眠薬代わりだった。

昭和の終わりのころ頃は、いわゆる働き盛りのころで、毎日毎日、日付が変わる時間まで仕事をしていたが、体力も気力もあつたので苦にならなかった。そのころ、この小さな高知の繁華街にもセミプロのジャズバンドや女性ボーカリストのいる店がいくつあつて、仕事が終わった深夜、それらの店に出かけて、明け方までジャズを聴きながら酒を飲んでいた。ときどき、ぼくの耳でもわかる音程の外れがあつたりしたが、それがまたセミプロらしくて「おお、外れてる」とつぶやきながら聴くジャズと酒は疲れた体と心には、ただただいい気分で、いいエキスだった。

平成にはいつてしばらくしてバブルとかいうものがポーンとはじけて、それらの店が一軒、また一軒となくなつて、ほんとうに突然、いつものように出かけると店のドアに「閉店」の張か、をテーマにして長々と展開する映画だ。最近、3Dプリンターというものができて、立体的なプリントができるそうだが、それに近いものだが、決定的に違うのは、タルコフスキーの物体は感情を持つということである。

見るたびに印象が変わる映画と変わらない映画があるが、タルコフスキーの映画はこの作品に限らずすべて印象が変わることとはない。初めて見たときの印象そのまま、その饒舌と楽観主義的な安穏性（と、その裏にある孤独感、絶望感）がタルコフスキーの映画を支えている。だから、かれの映画はただただ気分よい映画なのかもしれない。いや、そうではないのかもしれない。すこしばかり斜に構えてシニカルぶっている多くの懐に、かれのセンチメンタルと同調してしまう回路が潜んでいるので、かれの映画が心地よいのかもしれない、となんとなく昔からそうおもっているのだが、自分のことなど自分にわかるはずもなく、タルコフスキーとパゾリーニはぼくの両極端に位置しながらも、ただただ気分よく見ることができる映画監督だ。

スタニスワフ・レムはタルコフスキーの映画が科学的でないことを批判したというが、今までぼくが見たSF映画で真に科学的だった映画があつただろうか。キューブリックの『2001年宇宙の旅』がかるうじて科学的であつたかもしれないが、他の映画は科学的な装いをしているが、結局は監督の言い分を通すための小道具に使われているとしかおもえない。もつとも、映画が真に科学的である必要はなく、科学的であるという装いをどううまく使うかも監督の腕にかかっているのだろう。

り紙があり、そんなことが二軒三軒とつづいて、高知の繁華街からジャズの生演奏を聴かせる店がなくなつてしまった。それとどうじに、ぼくの「気分いい夜」もなくなつてしまった。エラ・フィッツジェラルドやビル・エヴァンスもやってきた高知の街が静かになった。

それからもう20年あまりがたつ。年齢のせいもあるだろうが、このころは脳内の快樂物質が減少して、エンドルフィンの量がほとんどないのではないかとさえおもわれる生活をしている。だから、ただただ気分がよい、ということがこのころはすっかりなくなつてしまつていたので、この映画はおもいがけないプレゼントだった。

ただただ気分よい映画、といえば、死ぬまでにはもう一度見ておきたいとおもつていたタルコフスキーの『惑星ソラリス（1972年・ソ連）』をツタヤで見つけた。すこしうれしかった。原作者スタニスワフ・レムの批判「科学的でない」に、罵倒でやり返したというめめしいタルコフスキーの代表作だが、やっぱり、あいもかわらずめめしく、美しく、思念的で、センチメンタルで、タルコフスキーらしく、ひとを愛することを前面に押し出してきて恥じることをしらない作品だ。もう何回見ただろうか。

物語はソラリスという惑星の海には、ひとの脳内の思念を物質に作り替えてしまう働きがあつて、主人公の心理学者の亡くなった妻が再現されて、妻との葛藤とその後悔が、他者（レムの小説では、未知なる存在）と向きあうこととはどういうことか。多世界解釈という概念もときどき映画で使われている。端折つていえば、この世界はたくさんあるということで、映画のネタとしてはいろいろな料理方法ができるから楽しいのだが、ほんとうはすこしややこしい理論で、量子力学の世界では原子は複数の状態の重ねあわせとして存在している、ということ、量子力学とはミクロの世界、素粒子の世界を説明する物理学なのだが、その量子力学の世界では、原子は「ない交ぜの状態で存在している」、たとえば、死んでいる状態と死んでいない状態が、決定されることなく、同時に存在する、という科学的とはおもえないあいまいな世界がミクロの世界では存在する、ということなのでこれ以上は触れない。

パラレルワールド（多世界）とは、ぼくたちの住むこの時空から分岐し、並行して別の時空が、いくつもの世界が存在するというところで、この世界にいると、別な世界で暮らしているのぼく、がたくさん存在するというSF映画の世界ではおなじみの概念だ。ひとつ違うのは、SF映画の中ではそれら違う世界を行き来したりしてスリル満点のストーリー運びでわくわくさせるのだが、量子力学の理論では他の世界とは接触することができない、とあっさり否定している。まあ、そういう違いはあれ、ぼくたちはこの世界のぼくが唯一のぼくで、苦戦奮闘しながら生きておもつているが、別な世界のぼくは他人の不幸を食い物にして平然と生きておもつているかもしれないし、あるいは、世界を救う救世主として存在しているかもしれない。

ほんとうにパラレルワールドが存在するのかどうかはわからないが、ひとの心はつねに多世界を抱え込んでいる。他人の不幸を食い物にしたり、救世主になったりすることはないが、日々の暮らしのなかにふと「自分自身の異次元」を見つけたことがある。物理学者は、パラレルワールドには触れることができない、と断言しているが、もしかしたらほくらは日常的に、ちょっと隣の自分と入れ替わっているかもしれない、とおもったりする。とくに坂多瑩子さんの書くものを読んでみるとつい、そうおもってしまう。詩集『ジャム煮えよ』（港の人）から「不都合はないのだが」全篇。

へやの柱に

かけてあった状差しに

茶封筒が入っていた

やけに大きい

その大きさにあわせて

状差しも

大きくなっている

ような気がしたが

へやも大きくなっているようで

別に不都合はないのだが

もしかしたら

自分が小さくなっているかもしれず

そんなことも気がつかず

服も着替えないで封筒をあけてみた

り合ってくれない現象を体験してしまうのだが、読者のほくにしてみれば（いや、作者の坂多さんもきつとそうおもっているだろうが）それは別世界（パラレルワールド）のことではなく、この世間の仕組みはもととそんなものであったのを、凹凸を平らにして、だれもが均等に、均一に、平均的に、愚痴や不満をなだめるかのような世間でありたいと、ついつい、突拍子でもない事象は「世間の懐」が呑み込んでしまっているだけのことと、それでこの世間はだれから見てもそこその顔をして乙にすましていられるのだが、ときどきほんとうの世間（それを信じたくない人には、嘘の世間）が顔を出すときがある。状差しや豆腐という物体に翻弄されてアタフタしなければならぬ羽目におちいったとき、「不都合はないのだが」と言える人と、悪夢を軌道修正しなければとおもう人と、知らぬ存ぜぬで素通りしてしまう人と、翻弄されていること自体自覚できない人たちがいて、この世間はしごく正常に太陽の周りを回っているのだ。地動説を疑いもせずだ。

でも、坂多さんは豆腐のなかをかけぬけてどこへいくのだろう。そんな坂多さんの行方が気にかかる一冊だった。

林美佐子さんもこの世間の不思議さを不思議とおもわず、一見不条理そうなこの世間の仕組みを正しく生きているひとだ。詩集『鹿ヶ谷かぼちゃ』（詩遊社）から「マトリョーシカ」全篇。

私より一つ年上のあの子は

おもちやをいくらかでも貸してくれた

それは小澤氏からで  
ちよっとした書き物の依頼だった  
和紙が何枚か入っている

そのお札のつもりか  
豆腐も入っている

とりだすと

むくむく大きくなる

私の背丈と同じくらい

食うか

食われるか

で

かけぬける いそいで

豆腐のなかをかけぬけていく

なにもかも不都合はない。この世間の不思議も、この身にふりかかる珍事も、なにも不都合なことはない。ほくらはこの世間を、なんとなく倫理的で、典型的で、単眼的で、予定調和的に生きているが、ときどき、そんな自分を否定、というか、ちよつとひっくり返してみたい、とおもったりする 때가あつて、そんなときはこの世間の神経細胞がすこし敏感になつたりして、おもいがけず隣に展開されているもうひとつの世間（パラレルワールド）の神経と交差することがあり（と、なんと非科学的なことをいっているのか）、坂多さんは状差しよりも小さくなっている自分を発見したり、自分よりも大きくなつていく豆腐のなかを疾走してしまう、などという、この世間ではまともに取

お手伝いさんの作るプリンもマドレーヌも

すきなだけ食べさせてくれた

姉妹のようだと人は言った

私がマトリョーシカに触れると

あの子は言った

開けちゃだめ

おそろしい生き物が入ってるから

お手伝いさんが出かけている間

あの子とベッドで遊んだ

あの子が言った

裸になろう

誰かに話したらもう遊んであげない

薄暮の産院で

産後の私が横になっている

気づくとそばにあの子が立っている

あの子が私にマトリョーシカを渡す

私がそれを開けた時

あの子の体も私の体も上下二つに割れ

床の上に転がった

マトリョーシカというのは人形のなかに人形が入っているや

つで、開ければ開けるほど小さな人形がどんどん出てくるやつで、おそろしい生き物が入っているとあの子が言うのは、入っているのは、私の顔をしているが私ではないのに世間は私であるという私、なので、そんなふうに私のことは言われたくない、とあの子はおもっていて、唯一の私であるためにはだれかと秘密を共有しなければ、秘密を持つ私と持たない私を区分しなければ、と、そういうことでしかあの子はマトリョーシカの自分を克服できなくなっている。しかし、だれもマトリョーシカの私を克服できやしない。子ども時分は狭い世間をどう渡ればいいのかとまどいがちで、そのため自分の許容範囲をつい狭めてしまうこともあるのだ。

時を経ておとなになり、なんとなく世間の仕組みも自分なりに解釈できるようなおとなになり、この世間をそれなりに納得できるようなおとなになり、マトリョーシカをなぞるように自分の相似形が生まれたとき、あの子も私（林さん）も、無意識のうちに抱え込んできた小さな私が、上下二つに割れた体のなかからあふれ出てしまうのはいたしかたのないことだろうか、それともそれは林さんとあの子の秘密が溶解しはじめたからなのだろうか。この世間はマトリョーシカそのものである。

中島真悠子さんの詩集『錦繡植物園』（土曜美術社出版販売）から「閉ざされて」全篇。

ある時私はひとりで居ることに飽きた  
地の果てからやって来て

／小さな家で暮らしはじめた」もの、とは言葉だろうか。あるいは、「気の遠くなるほどの大海に／死体で蓋をするもの／暖炉で太陽を燃やすもの／裸のまま月を喰らうもの」とは中島さんの身体の表皮のような感性というものだろうか。それとも、中島さんの地下植物園に住まおうと錦繡のような世間からやってきた中島さん自身かもしれないし、中島さんの身体と心性を踏みしだく、あるいは、浸潤する他者かもしれない。それら名づけられぬもの、名づけてもたちまち霧散消滅してしまう生き物、のような言葉と身体と心性が混濁している存在が、常に中島さんの表皮を徘徊し、中島さんの呼吸をとらえようと、のそり、はらり、ゆるり、と漂っているのだが、それらを排除することは、中島さんの地下植物園が閉じられることでもある。光合成できない植物が、中島さんの体液をむさぼっている。いつか中島さんは植物と同化するのだろうか、それとも冷静に植物の行方を見届けるのだろうか。

川島洋さんの詩集『青の成分』（花神社）から「鍵」全篇。

川べりの道で鍵を拾った。真鍮製の古めかしい鍵だ。この頃は見かけなくなつたこんな無骨な鍵を 誰が落としただろう。交番に届けるのもためらわれ 掌の中になつかしいような重みを温めるうち 部屋に持ち帰つてしまった。

かつてはにぶい光にぬれていたであろうその鍵は くす

深い穴から湧き出たものたちと  
小さな家で暮らしはじめた

彼らが居ると辺りが暗くなった  
だから本当には顔も見えないのだろう  
ただ彼らはやさしく 常に私たちと謳つた

気の遠くなるほどの大海に

死体で蓋をするもの  
暖炉で太陽を燃やすもの  
裸のまま月を喰らうものらと  
幾年か共に過ごした

私は彼らに囲まれて繕いをしながら  
朝と夜を溶け合わせることを目論んでいた  
彼らのように私たちと謳いたくて

しかし真昼が知らぬ間にしのびこんで  
同居していたらしい

気がついたとき  
みんな透明に硬直しはじめていた

真昼を追い出した日から  
地の果てには平坦な虹しか見えない  
いま深い穴はガラスのような遺灰で閉ざされている

「地の果てからやって来て／深い穴から湧き出たものたちと

んだ黄土色に乾いて 私の机の上に置かれている。時々  
手に取り なでさすってみる。すると これは子供の頃に暮らしていた家の玄関の鍵だという思いが 確かな重さどぬくもりを増してくるのだ。父も母も若く 屈託ない毎日を送っていたあの小さな平屋の家。学校から帰ると鍵を探り出した牛乳箱の裏の隙間。村上君の顔 豊田君の顔。畑中のおばさんと幼いフミちゃんの顔……

回想は少しずつ寒天状に固定化してくる。それはもつと淡いままにしておかなければいけないのに。とうの昔に取り壊され失われた時代に手を引かれてはならないのに。鍵は あきらかにあの扉を開けたがっている。

夜 仰向けに寝て あばらのあたりを静かになぞっていると やがて指先が鍵穴の窪みに引っかかる。そのくり抜かれた金属の冷たさから私はあわてて手を離す。気づかないふりをしてるが 私は知っているのである 鍵がいつのまにか机の上 私の耳元に来て ひんやりと横たわっているのを。

この鍵とは私である、といってしまうたらあまりにもあたりまえすぎて川島さんの詩のおもしろさを損ねることになってしまう。そうだが、やはりこの鍵は私である。できるならば鍵と性交したい、と川島さんはおもっている。鍵の窪みに自分の男根を潜り込ませて、寒天状に固定化してくる時代をかき回してみ

たいとおもっている。そしてできることなら快楽の声をあげて、夜の節々で眠っている他者の耳に私の快楽を届けてみたい。届けられた快楽は無数の自慰や性交を呼び覚ますかもしれない。そんなふうにかつてはにぶい光にぬれていた鍵の窪みに私の男根を差し込んで失われていった快楽を思いおこしてみたい、と川島さんもおもっている。

尾世川正明さんから『フラクタルな回転運動とかれの信念』（土曜美術社出版販売）という詩集をいただいた。フラクタルというのはフラクタル幾何学という数学上の言葉で、自己相似性という意味で、簡単にいうと、図形の全体と部分が自己相似性を形成していることである。いい例かどうかかわからないが、リアス式海岸を大まかな地図で見ると細かいギザギザがある。それをほとんど近づいてリアス式海岸の部分を見ても同じようなギザギザがある。まあ、そんなようなことである。集中「フラクタルな回転運動と彼の信念」という作品がこのことをうまく表現している。

ウォーキングの場所として公園の遊歩道があつて  
遊歩道がめぐる池がタマゴ型で縁は少し波打っていて  
周回中には対岸がいくどとなく近づいたり遠のいたりする  
彼はむかしからそのことに深い意味を見つけていて  
朝の運動は彼にとって聖なる儀式のひとつになったらしい

(中略)

その信念を終わりの日まで脳の中で回転させるつもりなのだ  
あまりにも尾世川さんの意に即した一編を引用してしまつた。しかし、尾世川さんの、自己と他者とのフラクタルな関係を具体的に提出している作品で、この詩集を紹介するときこの作品が一番ふさわしいのではないかとおもつたのだ。私も他者も、フラクタルな関係でいえば、どっちこつちないものだ。私も他者もない交ぜになった状態でこの世間は回転しているのだ、きつと。

量子力学はミクロの世界を説明する科学だ、と先に書いたが、体内もまたミクロの世界である。分子の集まりは原子によつて構成され、その原子も電子、陽子、中性子などから構成され、その中性子もクォーク、レプトンなどといった素粒子で構成されている。それらがくつついて身体ができていく。偉大な接着剤がほくらの身体にはあるのだ。

そのほくらの体は約60兆の細胞で構成されているといわれている。そのうち毎日5千億個の細胞が入れ替わっている。核酸(DNAやRNA)の一声で細胞がコピーされつづけている。そのとき、コピーミスや、何らかの原因で傷つけられた細胞をコピーすることで、ヒトは健康が損なわれていく。

伊藤公成さんから『カルシノーマ』(濠標)という詩集をいただいた。カルシノーマとは癌のことだそう。伊藤さんは癌の研究機関で働く研究者のようで、「身体に宿る生命というのはとてつもない力を秘め、自分自身でありながら最後のところ、

彼は長い間国際線旅客機のパイロットをしていたので太平洋も大西洋も毎週のように飛び越えて球形の地球を数千回も東西にまわってきたことになる

(中略・次の行は彼の5人の息子のことだが)

一人は足の長い陸上選手でトラックを一万メートルも走り一人は身が軽くて競馬の騎手になつて馬場をまわり筋肉質の体操選手は鉄棒の周りでひたすら大車輪を続けスケート選手はリンクをまわった上に4回転のジャンプもする

そしてテニス選手は実際に世界をまわるツアーにでる池をまわりながら彼は自分の人生にはとても満足しておりその人生とはこの世界をまわることであつたと考えている電子が原子核をそして地球が太陽のまわりをまわるようにすべてのものはどこかでまわつて存在していると信じているこの信念は彼をずっと幸福にしたし結果的に善人にしてきた今も公園の周回路をめぐる彼はおそらく七十歳を越えていて

自分でも少しずつ脳の衰えを自覚してはいるが公園のメリーゴーラウンドをまわることをやめてはならない青空の大観覧車も毎日まわり続けなくてはならないと

生命体自身が把握できない、制御することのできないもののがうです。それが不思議でしかたなく、そしてとても貴重なことであるように感じます。そんなものが、この地球という天体に誕生し、宇宙に存在している奇跡がまぶしいほどです」とあとがきで癌について語っている。集中から「蛍光染色法」全篇。

闇に  
ほたる火  
ちいさな胃が顕微鏡の下で  
かすかなひかりを発して横たわっている

弱拡大から強拡大へ  
顕微鏡の倍率を上げていくと  
夜空の天の川が  
無数の星から成ることがわかるように  
ひかりの正体があらわれる  
蛍光色素に染められた細胞たち  
夜間飛行の航空機が  
大都市の空港に着陸するときのように  
眼はひかりの滑走路に降りてゆく

ヒトの組織とはなににか  
眼下に横たわるものはなににか  
この無数の気配

ときどき暗い胃をみる

蛍光色素を拒絶する

暗い星の集団

黙りつづける大都市の闇

沈黙する胃に出会うとき

自分は降り立つ場所をみつけれない

——「がん」だ

うつくしい一篇だ。身体の内部が天の川を宿している、という発想はべつだん新しくもないのだが、あらためて書かれてみると、そのうつくしさを再発見することになった。大都会に住んでいないので、大都会のひかりと滑走路のひかり、は想像するしかないが、その人工的なうつくしさと、宇宙に横たわる天の川のうつくしさは、人体の細胞の美しさとなんら変わることはないうつくしさではあるが、伊藤さんは「ヒトの細胞」を見ながら「無数の気配」を感じる。この気配こそ、ぼくらの細胞が、みずからの来し方行く末という哀切を内包しているがために発している気配である。ぼくらの細胞は、ただ単に分子や原子の組み合わせでないもの、ヒトとしての歴史、原始の時代、暗い闇や獣の遠吠えに怯えながら体を寄せ合って暮らしていた時代の、ちいさな存在としてのヒトの記憶が、この惑星の支配者面しているぼくらの傲慢な細胞奥深く埋め込まれていて、その原始の、ヒトがまだ恐怖と畏れとみずからのちいささを知っていたころの気配を伊藤さんは強拡大の顕微鏡のむこうに感じてい

解決したいという欲望を抑えきれない存在でもある。

田中国男さんはこの本の帯で「いつしか人間中心の思考の恐怖からあらゆる生命そのものの視点の意思へと導かれ、一点の救いを求めるような祈りの感覚に誘われる」詩集だと書いているが、ヒトは知りたい、理解したい、納得したい、という利己的な欲望をどこまで抑えきることができようか。それをいったら、旧日本軍731部隊がおこなった人体実験と一緒じゃないか、ということになってしまふのかもしれないが。ぼく個人の感想をいえば、知りたいという願望は当然あるのだが（こどものころの夢は、生還がかなわなくてもいいから、宇宙の果てを見に行くことだった。宇宙の果てが見られたらもう死んでもいいとおもっていた）、秘密は秘密としておいておいてもいいじゃないのか、と。

科学が趣味のぼくにしては、秘密は秘密として、などという非科学的なことをいつているが、ちいさな動物の生命を利用してやろうとしていることは、みずからの身体の病气、死、苦しみを排除したい、そのことにつきることだったら、人体の秘密は秘密のままでもいいのだとおもう。ヒトは、そんなにまでして自分の生命が大事なのだろうか。（大事なんだろう、きつと）

伊藤さんはあとがきで「科学で『がん』に太刀打ちできない自分の弱さのあらわれ」と書いているが、ヒトが自分の細胞に太刀打ちできないのは、それはそれでいいのではないか。

ヒトは必ず死ぬ。寿命というものがあればそれを全うしたいのは、それはそうだろうが、そう自分の希望どおりにはいかない。いつか、どこかで、あきらめなければならぬ。どこかで

る。

蛍光色素を拒否し、ヒトに見られることを拒否している「暗い星の集団」とは、実験のために奇形の細胞を作りつづけている伊藤さんのころの暗部である。だから、その場所に「降り立つ場所」をみつけることができない。

「間引き 1」という作品では伊藤さんは、

井上君 もうよそう

こんな動物を増やすのは

一生ちいさなケージで暮らし

自分を殺してきた指にまで

やわらかな鼻をこすりつけてくる動物を繁殖させるのは

（中略）

井上君 もうよさないか

こんな透んだ赤い眼に見つめられるのは

この「井上君」とは伊藤さんである。ちいさな命を犠牲にして、その上にみずからの命を永らえるヒントを得ようとして苦心惨憺しているヒトの姿、自分の姿にむかって伊藤さんは「もうよそう」といつている。しかし、ヒトはこれらちいさな生命の犠牲の上にここまで繁栄してきた。この快楽と愉楽を手放すことはむづかしいし、ヒトは生命の謎、という悪魔めいた謎を

不運に見舞われてあつというまに命を落とすかもしれない。

医者ならば、研究者ならば、ヒトの命を最大限に優先して生命を永らえる方法を模索するのだろうか、ヒトの力ではどうしようもない現象もある。

話は違うが、ノーベル賞をもらった利根川進という生物学者は、ヒトが愛し合ったり、悲しんだりするというヒトの感情は、そのうち、脳のなかの神経細胞、電気信号の働きで説明がつくようになる、といっているのだが、科学の力はそんなふうによくの好奇心をかきたてるのだが、一方で、そんなことは知らなくともいい、ともおもったりして、科学的でない自分が一方に

ぼくはいろんな病巣を抱えて暮らしている。いつそれらが暴走するかわからない。それが一年後なのか、十年後なのか、わからないが、確実に死ぬ。それに、「もうすぐ寿命」という年齢でもある。いざ、死を目の前にしたとき、情けなくも「死にたくない」とおもってしまうだろうか、それとも死をすんなりと受け入れることができるだろうか。わからない。

まあ、わからないから人間をやっているのであって、なにもかもわかるような人生は、ほんとうは平凡で、単純で、つまらない人生だとおもう。

渡辺彰さんから『松澤有選詩集 星またはストリップ・ショウ』（書肆山田）をいただいた。渡辺さんが編集に加わっている関係で送っていただいたのだとおもう。

美術家・松澤有の名は知っているぐらいのもので、詩作品は

読んだことがなかったのでありがたかった。

松澤有（1922〜2006年）の有名なエピソードは1964年の「オブジェを消せ」美術を文章だけで表現せよ」という天の声を聞き、概念美術、觀念美術に移行したというのだが、それは「美術家になる前の彼が14年間にわたってきわめて旺盛に詩を書いてきたことを考えるなら、不意の声というよりは、むしろ松澤ならではの表現者としての二重性（言葉と美術）を解消せよ、觀念の世界へと止揚せよという、ある意味では弁証法的な必然性をもった啓示だった」と、跋文のなかで建島哲（詩人・美術評論家）が冷静な書き方をしているが、この選集は松澤有の詩人時代（1941〜1954年）の作品集である。

松澤有には1992年に出された『量子芸術宣言』という有名な本があるのだが、未読だ。量子の世界での重ね合わせの事象が、芸術を生み出す、というような本らしく、これまでの見える世界での見える物体、ニュートン力学が通用する世界での美術から、ミクロの世界、ニュートン力学では説明しきれない世界、量子の世界にまで美術の領域を広げようという意欲的な本らしく、量子の世界ならほくにも入り込めそうなのだが、なんとなく手に触れたくない、というのは、「芸術」とか「アート」とか大仰な呼称がむかしから嫌いなせいだとおもう。

アートは、自然という意味のナチュレの対意語で、人工物という意味で、この町の高知大学には美術科があり、毎年多数の「アートをやる人」が卒業しているのだが、いまだにほくは「アート」というのがわからない。わからないから見に行ったらかたがない。

この選詩集には32の詩が載っている。

北園克衛の「VOU」で詩を書いていた人らしく、実験詩というか、モダニズム詩の時代、変革の時代に詩を書いていた人らしく、松澤有にとって「書かれたもの」が大事であって、それに付随する、作者にとっての意味、読者にとっての意味よりも、言葉の造形、無機質性、記号性、物質性、ついでにいえば、情緒の曖昧さを駆逐する、というべきものが優先されているのだろうか、などとおもいながら読ませてもらった。

人は誰でも歯車をもつ。歯車は人を押すのだ。  
そして歯車のなかにある衣裳。衣裳を脱げば、ほろほろの皺だ。

声。顔。忘却。風。私の河床に無数に崩れ落ちる砂よ。  
ぶつぶつ呟いている觀念よ。  
眼をおして絶えずあふれでる粉末よ。

なおさらに身悶えて、私は何処からでもつかむ。  
林檎をつかむ。蠟燭をつかむ。石をつかむ。  
空をつかむ。そのこわれた觀念をつかむ。  
なおさらに身悶えて、――

りした。ときたま感心する作品もあるにはあったが、どこがいいのかまったくわからない作品が多かった。まあ、それは個々差があるだろうし、若い人のやるうとして、ものが年寄りのほくには理解できないだけの話だろうだから、もうアートと名のついた展覧会へ行くのはやめたのだが、どうして絵を描く人たちは、アートや芸術というのだろう、と不思議でならない。ただ単に平面絵画、立体作品と言えはすむことなのに、アートや芸術などという呼称でみずからの作品を着飾っているにすぎない、としかおもえない。

高知には高知県展という公募展があり、かつては「立体作品部門」と呼ばれていたものが、いつのまにか「先端美術」という呼称に変わっている。「先端」を自称するなんてすごいな、いつもおもっている。応募している人は先端美術という呼称に違和感はないのだろうか。それとも、美術の先端、先っちょだけの存在でしかない、という自虐的な呼称だろうか。

まあ、こんな些細なことにちまちまとこだわっているのはほくの性格の悪さなのだが、芸術もアートも先端美術も、モノを作り上げるといふ秘やかで自律的な行為からは遠く離れている語感がして、ほくにはなじめないものだ。

だから松澤有の「量子芸術」というのもなんとなく遠ざけた気分だ。それでも、量子の世界で展開する事象を、想像力をふりしぼって見てみるとどうなるのか（そこでは、見る人すべの想像力が重なり合って、ない交ぜになって、決定づけられない状態のままであるのだろう、きつと。そういう興奮状態がそのまま残り残されている世界なんだろう、きつと。だから、

私は波の音を聞く。ああ、おびただしい波の音を聞く。むしろ。今は！ 私を殺す波の牙を。

そして、見よ。私は追われている。何処か運河のようなところだ。

霧の中で、私の過去はレモン色だ。

（不毛の骨・部分）

羊が、限界（柵）を乗り越える。紙の幽霊のように茫洋と。羊が門を飛びこえ、（画面に！ 定着する。）

その瞬間の、苦痛。その截れる瞬間に燃える、白煙！

（都市動線・全篇）